

瓦版OOC新聞

第4号

発行者

2016年12月14日

大森氏おしやべり倶楽部

11月9日(水)午後、第3回の「大森氏おしやべり倶楽部」が開催された。

当日はまず、「鮎沢御厨」(あおさん)、「日本史/中世」(さくさん)の説明があった。また、プロジェクトを使って、「箱根権現と大森氏」(あらさん)の発表があった。

箱根権現と大森氏 (大森氏の宗教政策)

一、箱根神社概要

箱根芦ノ湖の近くに建つ箱根神社は、霊験あらたかな社として地元や箱根を越える旅人の信仰をあつめ、源頼朝、大森氏、北条早雲、徳川家康など関東を支配した武将たちからは、関東総鎮守として尊崇されてきた。

明治以前までは、箱根権現さんと呼ばれ、神仏習合の典型的な私たちの一つである権現信仰を根本に持っていることがわかれる。

この箱根権現の建立は、各地に精力的に神宮寺を建て、初期の神仏習合を推進した万巻(満願ともいう)上人の手によるものである。

二、万巻上人

万巻上人は、京都に生まれ、20歳で剃髪し、仏典の読誦を日課とし、遂に万巻の経を読破したので万巻上人と呼ばれるようになった。

管根山縁起によると、749年〜756年には常陸国鹿嶋にあって、鹿嶋明神の社に神宮寺を建てていたらしい。749年という点、平城京では大仏が完成した年であり、九州の宇佐神宮から八幡神が上京して大仏建立を助けるという、神仏習合にとっても重要な年であった。

鹿嶋から箱根にきた万巻上人は、757年に箱根三社権現を勧請、社殿を建立した。その後の763年には、伊勢国多度神社の南の地を清めて小さな堂宇を建て、神像を安置して、多度大菩薩を祀った。

呪術的な神祇官制度のゆきづまりから、経済的に苦境に立たされていた各地の神社に対し、仏教側は、修行僧たちの手で、神々を仏教へ積極的に取り込むような働きかけをおこなった。万巻上人はその中の、いわばスーパースターとして、全国各地を巡り、ゆきづまった神々を仏の世界に誘ったのである。

三、箱根権現の創建

万巻上人が訪れた頃の箱根は、古代山岳信仰の霊場であった。厳しい自然環境での修行の場であり、正面に神山を拝む駒ヶ岳山頂では、天地開闢神話における三柱神すなわち自然神を祀っていた。

万巻上人は、この地に権現社を創建するにあたり、先ず、先神を自然神から性格神への置き換えを行った。天孫降臨で最初に地上に降り立った瓊瓊杵尊(にぎのみこと)、その後である木花咲耶姫命(このはなさくやひめのみこと)、これら二柱の天子である彦火火出見尊(ひこほほでのみこと)の三神を箱根大神として祀った。そして、それらの三神の元の姿(すなわち本地)として、文殊、観音、弥勒の三菩薩を置いた。こうして、七五七年には仏神一体の箱根権現が創建された。この頃とほぼ同時期に、男神神、女体神の二神からなる伊豆山権現も創建されている。

四、本地物語(前世の物語)

箱根の三神と伊豆山の二神の由来を前世の物語として語った本地物語が作られ、『箱根山縁起絵巻』として残されている。

それによると、天竺ス羅奈(しらない)国中将には、常在御前と靈鷲御前という二人の娘がいた。継母に憎まれた姉の常在は、島に流され土牢に閉じ込められ、さらには檀特山で剣を逆さに立てた穴に突き落とされるという受難を蒙る。檀特山で波羅奈国の太郎王子と次郎王子に助けられた姉妹は、波羅奈国に赴きそれぞれの王子の后になる。一方、父の中將は二人の娘を捜すため出家し、回国の旅に出る。波羅奈国で娘に再会した父中將は、継母の祟りを恐れ、日本こそ仏法弘通の地であるからと、一同で日本に渡る。そして大磯の高麗寺から、常在御前と太郎王子が伊豆山に赴きそこで二所権現となり、父と妹の靈鷲御前と次郎王子は箱根山に赴いて三所権現となったという。

この物語は「ままこいじめ」というタイトルで、箱根の古い伝説として語り継がれている。

仏教説話のかたちをとりながら、天竺からきた菩薩が姿を変え、日本の神として現れるという権現信仰を、衆生にも分かりやすいかたちで表現しようとする工夫のあとが見てとれる。

(参考資料)

『箱根神社 信仰の歴史と文化』

会の終了前に、参加者は「次回ないし次々回に整理して発表したい事柄」を記入した。